
恋愛のしかたを知ったなら

まめ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛のしかたを知ったなら

【Nコード】

N9056Y

【作者名】

まめ子

【あらすじ】

二十歳の夏。昔好きだった彼と再会する。小学生のころの記憶を紐解きながら、もう一度紡がれ始める恋。子どもだったから、わからなかった恋愛のあれこれ。今からならうまくできるのかな。

序章

私は実家から通える距離の大学に通っていた。

小中学校時代の友達とはほとんど連絡をとっていないので、詳しいことはわからないが、実家から離れて暮らしている同級生はとても多いと思う。

彼も、その中の1人だと思っていた。だって、遠い私立の名門高校に合格したのだから、当然そのまま付属の大学に入学したと信じて疑わなかったのだ。

だからもう、二度と会うことはないだろうと思っていた。

いや、それは言い過ぎか。

姿を見ることはあっても、言葉を交わすことはないだろうと、そう思っていた。

(あ…)

昔の同級生を、地元の駅で見かける――それは、年に数度はあることだ。

しかし、こちらから声をかけることはほとんどない。

私はこの数年で、とても引つ込み思案になった。

あの頃の私には戻れない。

誰もそんなことは気にしないと思うが、今の私を見て、つまらない奴と思われるのが怖いのだ。

だからこのようにたまに見かけると、気づかないふりをして道をそれて歩く。

昔好きだった、あの人ならなおさらだった。

彼は改札から出てくる、人の波の中にいた。

どうして、こんなに大勢のなかから、見つけてしまったんだろう。

さっさと退散してしまおうとしたが、遅かった。

気まずい相手であるときに限って、ぼつちり目が合ってしまうものだ。

でも、彼の性格を考えたら、すぐに目をそらして行ってしまうだろう。

気まずいけれど、それならそれで楽だ。

しかし、そもゆかなかった。

なんと、彼は驚いたように目をまるくして、立ち止まって私を凝視していた。

そんなに見つめられると、私も目をそらすことができない。

秒にしてみたら、2秒も経っていないと思う。

急に立ち止まった彼に、後ろから歩いてきた人がぶつかったことによつて、その見つめ合いは終わった。

ぶつかった人に、彼が頭を下げている。

私はというと、居たたまれなさにどこかへ逃げたくなくなっていたが、ここで立ち去るのは失礼な気がして、その場に突っ立ったままである。

しかし、彼はどうするつもりなんだろう。

私は、どうするつもりなんだろう。

人波をよけて、彼がこちらへやってくる。

ああ、何も変わっていない。

緊張気味の顔。

あの頃のヒロだ。

- - -

「ヒロが好き」

小学校を卒業したその日。

私はヒロに告白した。

恋多き小学生時代。

今思えばそのほとんどが恋に恋しただけのものだったけれど、ヒロへの思いだけは、本当の恋だったんだと思っている。

学校が別れた高校以降に出会った男の子も、恋に発展する前に、必ずヒロと比べる自分がいたからだ。

ヒロとは、小学校の6年間を同じクラスで過ごした。

低学年のときはムードメーカーで、いつも笑いの中心にいた。

高学年になっても男女隔てなく話せる人ではあったけれど、どちらかといえば真面目な子どもだったと思う。

一番信用できる男の子。

それに気付いた時には、もう好きだった。

...

「久しぶり」

目の前に来たヒロは、緊張した顔のまま、そう言った。

「うん…久しぶり」

「元気？」

「うん…」

返事しかできない私。

せつかく声をかけてくれたのに、がっかりさせてしまったらどう思うた。

「これから、もし暇だったら…」

しかし、そうでもなかったらしい。

そのまま彼は、私をお茶に誘ってくれた。

本当はすごく嬉しかった。

迷うことなどなかったのに。

うまく話すことができない恥ずかしさに、答えるのに時間がかかってしまった。

二十歳の夏。

十二歳の私が、トントンと胸を叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9056y/>

恋愛のしかたを知ったなら

2011年11月27日01時50分発行